教科等研究会（小学校音楽部会）

令和３年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

「音楽のよさを感じ取り、生き生きと表現できる子どもの育成」

（仮説）音楽を形づくっている要素に気づき、それらが生み出すよさや面白さなどを感じ取る活動を位置づければ、自分の思いや願いをもって、生き生きと表現できる子どもが育つであろう。

２　研究経過

第１回 6月7日		第２回 8月5日		第３回 12月7日		第４回 1月27日	
人数	場所	場所	研修	場所	研修	場所	研修
16名	甲佐小	甲佐小	(講話)中止	甲佐小	（講話・演習）	甲佐小	（実践発表）中止

３　研究の概要

(1) 研究の内容

①本部会の研究テーマの考察

学習指導要領には、音楽科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する際の留意事項として、「他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見出したりするなど」と記されている。これは、改訂の基本的な考え方の一つであり、これまでも大切にされてきたことである。さらに、その文言に続く「思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした学習の充実を図ること」は、現行学習指導要領のポイントである。主体的な学び、対話的な学び、深い学びの視点から授業改善を図ることで、これまで大切に積み重ねられてきた学習や指導方法を継承し、さらに質的に充実させることが重要であると考える。そこで本年も研究の軸を大きく変えずに取り組むことにした。

「音楽のよさを感じ取る」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形作っている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化と関連付けることである。学習指導要領の中でも、これらを「音楽的な見方・考え方」を働かせることと位置づけ、この見方・考え方を通して、音楽科の資質・能力を育成するものと明記されている。

「思いや願いをもって表現する」とは、思いや意図をもち、それを実現するために必要となる知識や技能を習得して、歌ったり演奏したりするということである。また、主体的に他者と協働する中で自分の考えをより深めたり再構築したりしながら豊かに表現することは、「生き生きと表現する」姿であると考える。音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みをもとにすることにより、音楽のよさや美しさを感じ取り、音楽への思いや願いをもって豊かに表現できる子どもの育成を目指した。

②研究の実際

ア　夏季研修会

平成音楽大学の岩山惠美子教授を講師としてお迎えし、音楽科の授業づくりのポイントについて講話していただく予定であった。

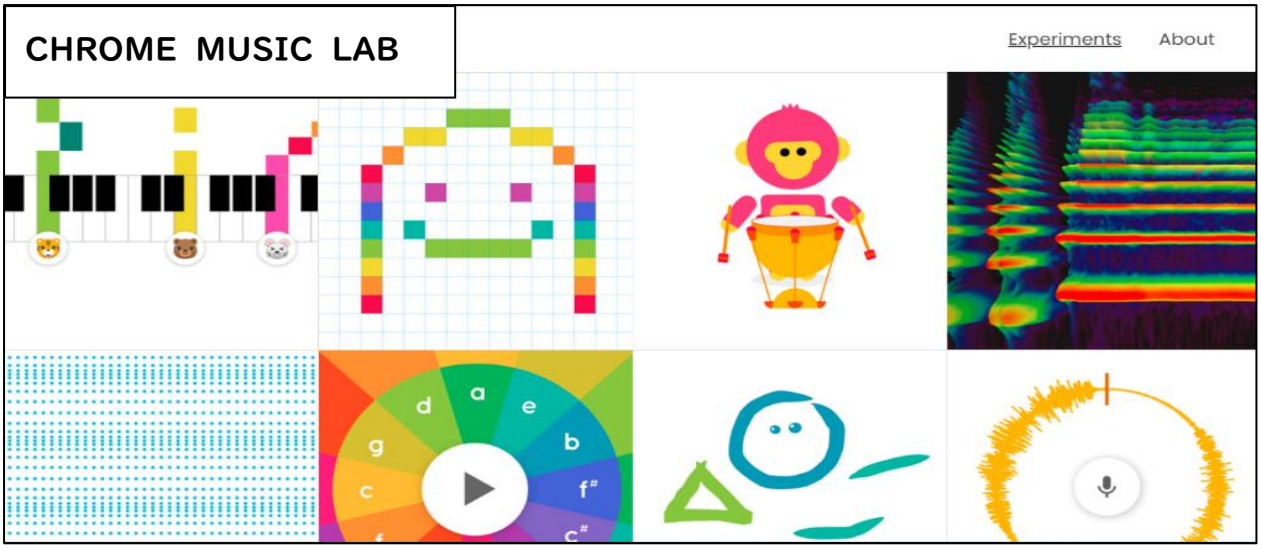
イ　研修会（講話・演習）

「音楽科におけるＩＣＴの活用について」

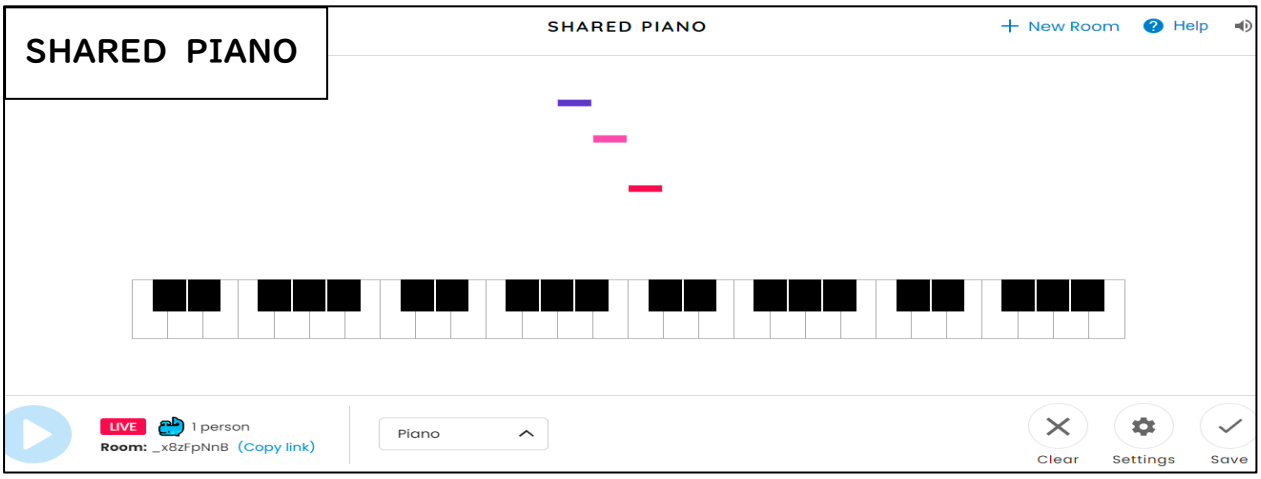
講師：アイシーティーサポートスクエア　園田　晃弘　氏

音楽科におけるＩＣＴの活用について、特にＧＩＧＡスクール構想に伴い各学校で配置、整備が整ってきたタブレットの活用を中心にお話しいただいた。自治体によって配置されている端末が異なるため、どの学校でも活用できそうなサイトとして「ＣＨＲＯＭＥ　ＭＵＳＩＣ　ＬＡＢ（クロームミュージックラボ）」、ｉＰａｄ専用アプリではあるが、研修希望があがっていた「ＧａｒａｇｅＢａｎｄ（ガレージバンド）」を紹介していただいた。

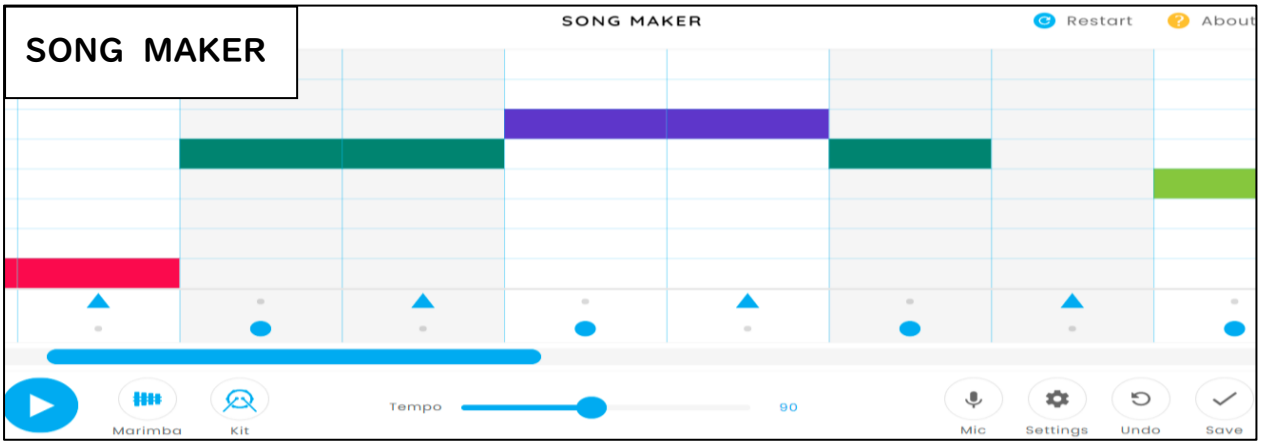
○実技研修：音楽の授業の中で活用できそうなサイト



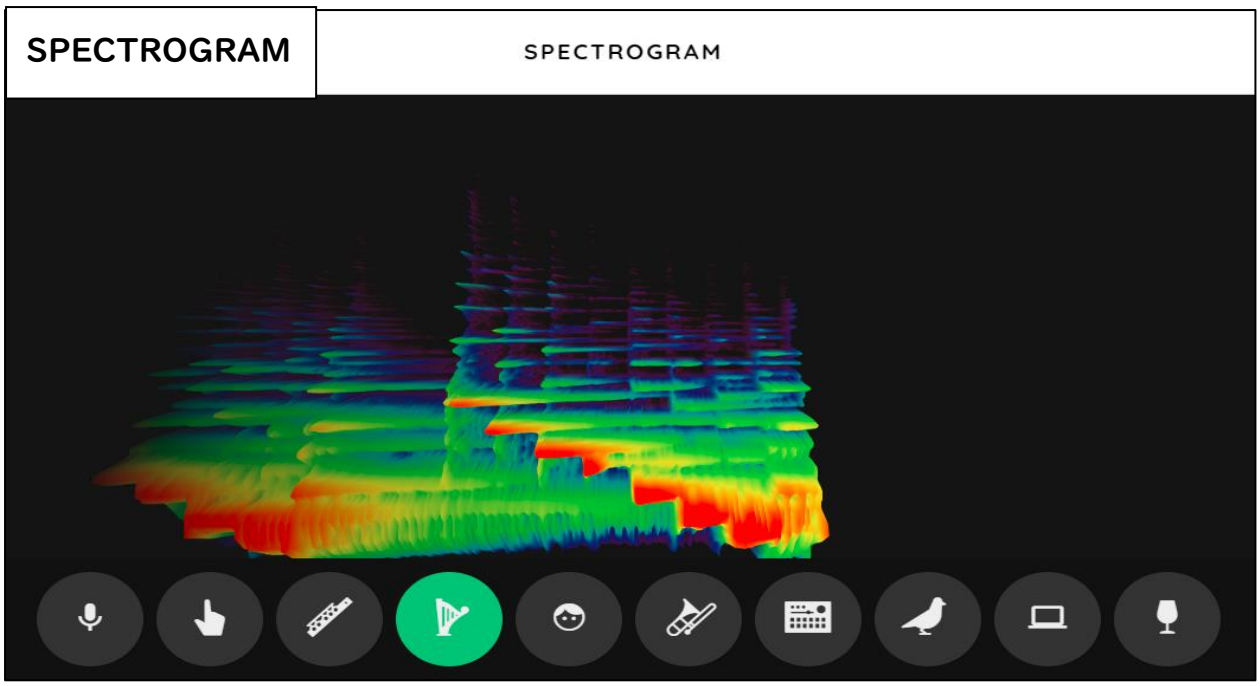
「ＣＨＲＯＭＥ　ＭＵＳＩＣ　ＬＡＢ」は、英語表記のサイトだが、カラフルな複数の Experiments というツールがあり、操作もシンプルでわかりやすい。



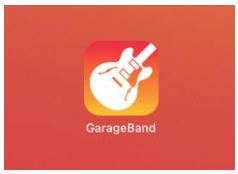
「ＳＨＡＲＥＤ　ＰＩＡＮＯ」は、ウェブ上で鍵盤の画面を共有することができるツールで、どの鍵盤を押さえるとよいかを指導したり、数人で一緒に演奏したりすることができる。ピアノだけでなく、木琴、ドラムなど音色を変えることができるので、応用の幅はあるツールだと思われる。



「ＳＯＮＧ　ＭＡＫＥＲ」は、マス目の中をクリックしていくだけで曲作りができるツールで、簡単な打楽器の伴奏もつけることができる。音色やテンポ、拍子、長さも変えることができるので、様々なアレンジが可能である。

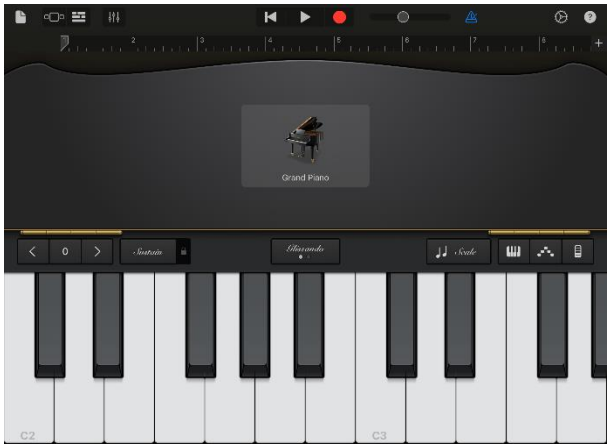


「ＳＰＥＣＴＲＯＧＲＡＭ」は、声紋分析のようなツールで、音が画像のような形で表される。あらかじめ用意されたフルート、ハープ、トロンボーンなどの音色を画像として見ることができる。また、マイク機能を用いると自分の声を見ることができるため、歌唱の指導に活用できそうなツールである。

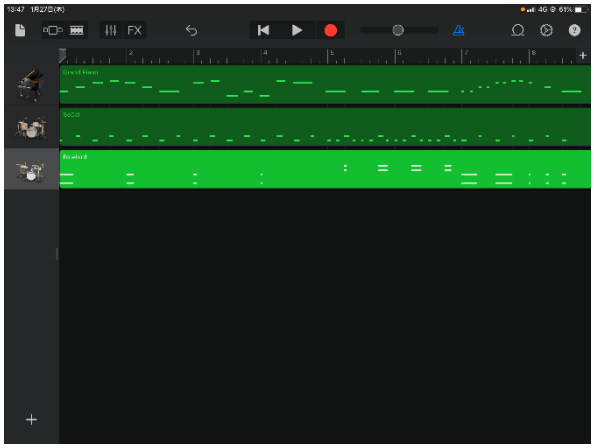


「ＧａｒａｇｅＢａｎｄ」は、ｉＰａｄをはじめとするｉＯＳのためのアプリで、音楽を演奏、録音できる。

キーボードを選ぶと、（資料１）様々な音色での演奏ができるだけでなく、録音をしてすぐに再生することができる。また、録音したものに重ねて録音することもできるため、簡単な伴奏をつけたして一人でも合奏のようなことができる。（資料２）



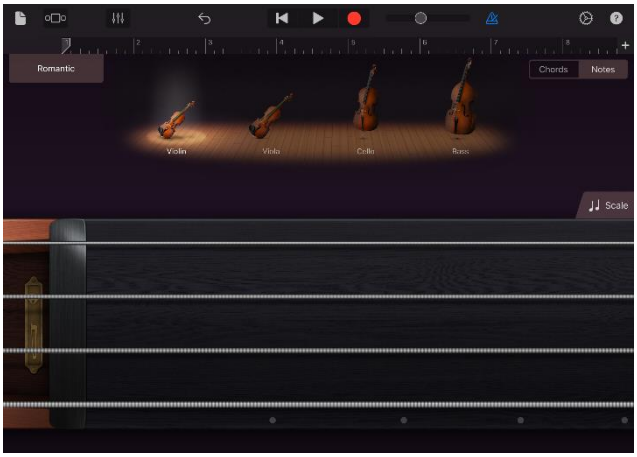
（資料１）キーボード



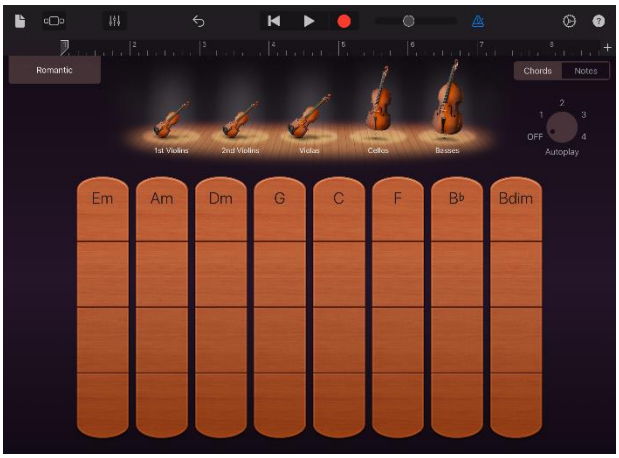
（資料２）

弦楽器の実物を触って音を出す機会はなかなかないが、ストリングスを使うと、指で画面をこすることでバイオリンやビオラ、チェロ、コントラバスの音色を出すことができ、あらかじめ用意されたコードを演奏することもできる。（資料３，４）同様に和太鼓や琴の音色が出せるものもあり、日本の伝統的な音楽の学習での活用が期待できる。（資料５，６）

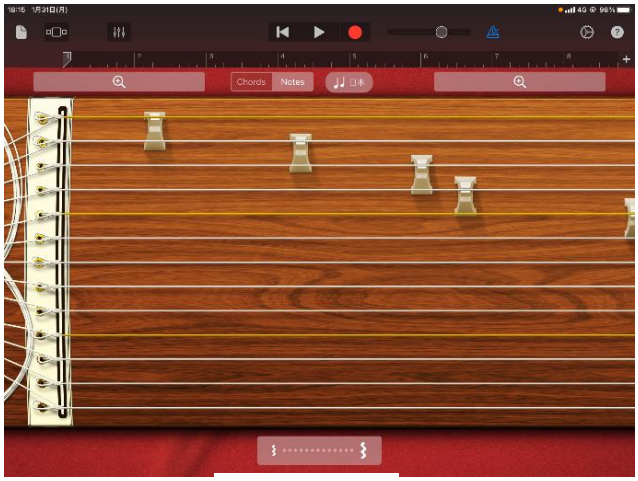
それぞれの機能や扱い方を説明していただいた後、実際に操作をして試してみる演習の時間をとり、どのような形で活用できそうであるかを考えた。



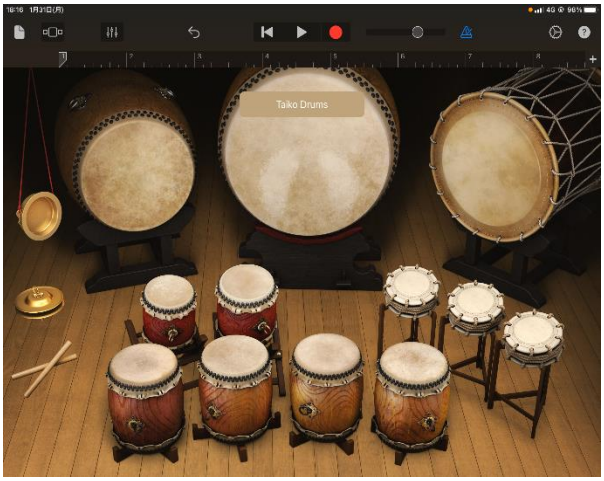
（資料３）



（資料４）



（資料５）



（資料６）

ウ　研修会（実践発表）

第３回研修会で教えていただいたサイトやアプリ、タブレットを授業でどのような形で活用したかという実践、あるいは活用できそうであるかというアイディアを共有する予定であった。

(2)　実技研修会の成果と課題

（成果）

○大変な時期だが、音楽の授業で子どもたちが「楽しい」と思える時間を増やす材料を得ることができた。

○音楽づくりや伴奏づくりなど、難しく感じるものもタブレットを活用することで、どの子も気軽に作ることができそうでよい。

○旋律やリズムの動き、音の高低や強さを視覚化できるのは、子どもにわかりやすい。

○楽器の演奏に苦手感を持つ児童に有効に使えそうである。人数の多いクラスでは、楽器の数が足りなかったり、騒音になったりするので、その点でもよい。

（課題）

●タブレットをやアプリを使うことが目的にならないよう、授業のねらいを明確にして使用する必要がある。

●ガレージバンドは、ｉＰａｄ以外では使えない。

４　本年度の研究をふり返って

音楽科の特性を考慮し、授業研究会は行わなかったが、ＩＣＴ、特にタブレットの活用に関する研修で、新しい音楽の授業の在り方を学ぶことができたのはよかった。